

私の一冊

一般教育等 館山光一 先生

吉田秀和著 『世界のピアニスト』

小鹿図書館 : 726.8/Y 86 (新潮文庫)

音楽ファンにとって、最頂の演奏家や曲についての批評を読むのはなかなか楽しいものです。それが自分の感じたものと異なっても、多少不愉快になりながら、やはり楽しんでいるように思えます。クラシック音楽の場合、ポピュラー音楽と違い一つの曲を何人もの演奏家が演奏することになり、自然と演奏家の比較というのが楽しみポイントとなります。ここで紹介する「世界のピアニスト」という本は、そのタイトルの通り、世界のピアニスト 59 人の演奏に関する批評を一冊の本にまとめたもので、まさしくピアニストの比較、として読むことができます。ただ、1976 年にラジオ技術社から刊行され 1983 年に新潮社の文庫本になった、ということですから、ちょっと古いかなとは思いますが。著者の吉田秀和氏はここであらためて紹介するまでもなく、高名な音楽評論家です。1913 年生まれということですから、すでに 90 を越えています。

このような批評を読むとき、(無責任な)読者としては、ある一線を越えてほしいという期待があるのではないかと思います。どのくらいまいのか、表現力は、どのジャンルが得意か、他の演奏家との比較等々。この本を読んで私が感じる面白さの源は、読者の期待に答えるその率直さのようで、自分の考えが明確に述べられている点はなかなか読者を楽しませてくれます。それも非常にテンポよく繰り返し現れてきます。名人の悪趣味だ....、あまり音楽を感じない...等という表現が次々と現れ、ここまで言い切っているのだろうか、と思うことも度々ありました。そして、このような評価に自分が同意できる時には不思議な快感を感じることができます。このあたりがこの本を繰り返して読む理由になっているような気がします。もちろん逆に、その批評に同意できないことも当然あり得るわけですが。

もう一つこの本には実に楽しませてもらったことがあります。この本は 1976 年に発刊されたわけですから、それ以後に有名になったピアニストは当然扱われてはいません。それはとても残念なことなのですが、現代の巨匠と呼ばれているポーリーニやアルゲリッチは当然ながら若手として取り上げられています。そこでの評価と現在の一般的な評価との比較は、私にとってはとても興味深いものでした。さらに、若い頃はそれほど注目されていなかったブレンデルが、さりげなく、ちょっと気になるピアニストとして扱われていたのがとても印象的でした。ただ、録音が古すぎて、ちょっと聴く気にならないというピアニストもけっこういて、そこは年代的な問題なのですが、非常に残念ではありません。

一人のピアニストの批評を読んでからその人のピアノの演奏を聴く、という感じで読むとなかなか楽しい一冊です。